不定期刊行　　第424号　2011.11.01

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

ヤズィックアグルの蒼い空 18　荷下げ

ヌルさんが撮影した頂上稜線を下山中の我々の様子、前3人が三戸呂、松田、大西、後方の2人が佐藤、久根の各隊員。トリミングしてあるが、下の写真には上部にトレースがはっきり見える。

8月6日、本日の仕事はC1の完全撤収である。RC はすぐ上部には湧水点があり、本当に気持ちのいいキャンプ地である。松田さん、三戸呂君の二人にテントキーパーを任せ、8:00に久根、佐藤、大西の3人でC1に向かった。昨日ほどの疲労感はないが、それでも身体は重い。出発して 20 分ほどで氷河の取り付き地点、何回も登り下りした氷河だが、今日これが最後の登りとなる。9:20、C1 着。今日もヤズィックアグルはその姿を惜しげもなくさらしている。最後の下げ荷をザックと背負子におさめ、RC に下ったが、恐らく25kg近くはあったはず。

RC に帰り着くと足を痛めた三戸呂君が献身的に動いてくれる。じっとしていればいいのに、これも性分だから言っても聞かない。昼飯にはおにぎりを、デザートにはプリンを作ってくれた。午後は装備、食糧を整理して明日以降の荷下げの準備をしたが、久根さんがすべて仕切ってくれた。隊がうまく機能しているのを感じ、嬉しかった。すばらしいロケーションの場所で僕らだけのゆったりとした贅沢な時間を過ごしながら、こんな時間は日本では絶対に生み出せないだろうなあと思ったことである。

8月7日、朝は鰯雲が出ていた。秋の寒気が降りてきたのだろうか？今日は当初計画のアタック予定日である。前倒しの計画でここまできたので、我々の大きなポリシーの一つでもあるテイクインテイクアウトの実践に向けても無理がない。一昨日は極度の疲労感があったが、この広河原の快適なキャンプ地のおかげで大分身体は楽になってきた。とはいえ、まだここの標高は5310m。足の調子が思わしくない三戸呂君には無理をさせないよう、今日もテントキーパーを命じ、他の隊員4人で8:00にABCに向けて荷下げに出発する。ここからは沢下りとなるが、早朝故、濡れて水流のないところは凍結していて滑る。とはいえ、もう何度も通って慣れた道、右手に氷河を見ながら下っていく。8:50には7月31日以来一週間ぶりとなる懐かしのABCに到着した。砂塵でかなり埃っぽくなったABCではあるが、我々の荷物をきちんと守ってくれていた。一休みした後、再びRCへ登る。空身故、足取りも軽い。下りとほとんど同じ所要時間で到着した。

これまでの好天に比べ、天気の具合が少し変わってきた印象がある。正午過ぎには大

きな日暈が見られ、その後は高曇りの感じで風が吹き出した。恐らく稜線では相当の風が吹き荒れていることだろう。昼食は三戸呂君が釜飯を炊いてくれた。コーヒーゼリーのデザート付き。昨日はプリン、一昨日はフルーチェと、いい年をした大人がこんな甘い物に癒されるとは・・・。時間がとてつもなくゆっくりと流れている。今日も午後は、テントの中でゴロゴロし、行動食を食べては飲料をすすり、・・・そしてまた寝る。急な動きをすると苦しいことだけが高所を意識させる。

ビールとハミ瓜で乾杯

8 月 8 日、今日も RC から ABC へ荷下げをする。昨日沢が氷っていて大変だったのを踏まえて、出発は日がしっかり当たり始めた 9:30 とする。それでも日陰はまだ氷っている。ここまで持ち上げた荷物をすべて ABC におろすため、2 日間休んでいた三戸呂君も荷を軽くして一緒に出発する。10:10 に ABC に到着する。最初にテントを開けた久根さんが「ヌルさん、来てたんだぁ。」と大声を上げる。テントの中には昨日はなかったヌルさんの置き手紙があり、差し入れのビールとハミ瓜が置いてあった。手紙には、登頂への祝福とねぎらいのことば、さらには無線機が通じない故の心配、とりわけ登頂日からもう 3 日になるのに何の連絡もない我々の隊への気遣いが流暢な日本語、丁寧な字で書かれてあった。それを見た三戸呂君「ヌルさん、字うまい。」さらに佐藤君は「俺より文章うまいですよ。」新聞記者よりうまい日本語を操るヌルさんに妙に感心。どうも昨日の夕方上がってきて、降りたようだ。

とりあえず、差し入れてもらったビールで乾杯。赤飯を炊いて、ハミ瓜をほおばり安全地帯まで下ったことを祝った。いったい何日ぶりのアルコールになるのだろう。21 日にイエチョン(カルギリク)を出る前の晩に飲んで以来のアルコールは腹に染み渡った。そこへ何と予期せぬヌルさんから無線がはいった。

ヌルさんからの連絡

「大西さん、大西さん聞こえますか？こちらヌルです。どうぞ。」これまで聞こえなかったヌルさんの声が無線機を通して聞こえてきた。「今は、BC の前の山に登ってそこから大西さんたちを見ています。ABC に着きましたね。」・・・なんと、ヌルさんは昨日テントにおいてあった予備の無線機を持って下山をし、今日は僕らがいつ来るかいつ来るかと心配で、ABC の見える BC の対斜面の山に登って、僕らの帰るのをずっと待っていてくれたのだった。

ヌルさんは心配してくれている。そこで、他のメンバーを残して、連絡をするために僕が一人だけ先行して BC に下ることにした。11:55、20kg の荷を背負子につけて BC に一人で向かう。みんなで歩いているときはさほど苦にならないが、一人で歩いていると荷が肩にずっしりと食い込んでくる。13:15 ようやく BC に到着した。ヌルさんは連絡が取れない上に、なかなか下山してこない我々のことを本当に心配してくれていて、もし今日なんの連絡もなかったら、国道に出て携帯が使えるところまで歩いて行って、長野の留守本部に連絡をしなければとまで考えていたようだった。僕らは、誰か一人でいいから BC まで伝令を走らせるべきだったのに、それもせず自分たちの荷下げのことで精一杯であったことを深く反省した。